目次

「いま、あなたに届けたい法話 I」

花まつり　企画調整局参事　松田　亜世　…2

ご先祖を敬うこころ　企画調整局参事（現小松・大聖寺教務所長）　保木　悦雄　…9

疫癘の『御文』について　教学研究所所員　武田未来雄　…16

信心と大衆心理　教学研究所研究員　中山　善雄　…25

ご本尊　企画調整局参事　橋本　真　…32

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう　教学研究所研究員　難波　教行　…40

不安と安心　教学研究所所員　名和　達宣　…48

誕生　青少幼年センター主幹　藤間　哲祐　…56

動画掲載ページ

しんらん交流館ホームページ（浄土真宗ドットインフォ）
「いま、あなたに届けたい法話」https://jodo-shinshu.info/ima_howa/

花まつり

企画調整局参事　松田（まつだ）　亜世（あせい）

子どもの声が消えた春

二〇二〇年の春、あまりにも早すぎる春休みがはじまり、近所の幼稚園の園庭や、学校の校舎から子どもたちの姿が消えました。全国各地のありとあらゆる学校から子どもたちの声が消えた二〇二〇年の春です。

私の娘の幼稚園の卒園式も縮小。「娘にとって一生に一度のことなのに」、親にとってみても「一生に一度のことなのに」と嘆いてみても、その悔しさを国の対応への批判に向けてみても、はたまたウイルスを憎んでみても、新型コロナウイルス感染症の感染拡大という事実は事実として、この世の中に横たわっています。

とはいえ、何ともやりきれないというのが、人間の正直な気持ちでもあります。「なんでこんなことになってしまったんや?!」、「この先どうなってしまうんやろう?」と、もどかしさや不安や、底知

れぬ閉塞感で満ち満ちているこの春です。

花まつりについて

さて、四月八日はお釈迦さまのお誕生日・花まつりです。全国各地のお寺や、仏さまの教えをいただく学校などでは、お釈迦さまの誕生された姿・誕生仏に甘茶をかけたり、白い象をひっぱったりと、お釈迦さまの誕生をお祝いする行事が行われます。

日本では、桜の花が咲く季節と時を同じくして、花まつりの季節がやってきます。桜の花の美しさは、あっという間にその花びらが散ってゆくその儚(はかな)さと相まって、私の心に響いてきます。

「散る桜 残る桜も 散る桜」。これは、江戸時代の僧侶・良寛(りょうかん)さんが遺(のこ)された句です。「散る桜 残る桜も 散る桜」、一見華やかな春の季節にあって、自分自身の命を桜の花の儚さに重ねる、見事な句です。

花まつりはお釈迦さまの「誕生」をお祝いする行事ですが、仏さまの教えに照らされてみると、人間の誕生は生まれた瞬間から、死を背負っています。桜の花が、咲いた瞬間から、やがて散りゆく命を生きているのと同じです。

老病死

生まれた瞬間から、私たちは「老病死」という現実を背負って生きていくことになります。生まれた瞬間から、老いつつある身を、縁が催せば病を生じる身を、そしてどんな人であっても、一切の人びとが、やがて命を終えていかなければならない、「この身」を生かされています。

花まつりといえば、子どもたちのための行事だと思われがちですが、この「生死一如（しょうじいちにょ）」の人間の身の事実を、お釈迦さまの誕生をとおして教えられる花まつりは、老いも若きも関係なく、私が「人と生まれた」ことを確かめる、そういった機縁なんでしょう。今日は皆さんとご一緒に、そのことを確かめて参りたいと思っています。

天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）

「花まつり」で飾られるお釈迦さまの誕生仏は、右手を天高く指さし、左手は大地を指さし、私は私として尊い・「天上天下唯我独尊」、そういった姿で伝えられています。お釈迦さまは、生まれてすぐに七歩歩いて「天上天下唯我独尊」、こうおっしゃったと教えられています。

「そんなことはないでしょう?」とおっしゃる方もおられるかもしれません。お釈迦さまといえど

も、生まれてすぐに歩いて、すぐに言葉を発する、そんなことはないでしょう。それは私もそう思います。

お釈迦さまも私たちと同じ、紛れもない人間としてお生まれになられました。お釈迦さまが実際に、生まれてすぐに歩いて言葉を発したかどうか、そういうことではなくて、七歩歩いて「天上天下唯我独尊」と、こうおっしゃったと伝えられている、そのことの意味を戴いていきたいと思います。

私の誕生　～「お任せ」の世界～

みなさん、ご自身がお生まれになった時のことを覚えていらっしゃいますでしょうか？「オギャー！」と大きな声を上げてお生まれになられましたでしょうか？　どうでしょうか？

「オギャー！」と、どうやら生まれてきたらしいと、身近な親御さんや周りの方からお聞きになられて、「ああ、そうだったのか」と、そういうことだと思います。

人間の誕生は、自分の力からしたら全く無力なものです。覚えてすらありません。すべて「お任せ」の世界を生かされていました。いや、実は今も「お任せ」の世界を生かされているのですが、「私が、私が」という自我というものが邪魔をして、そのことを忘れている、それが仏さまの教えか

ら照らされてみると教えられることです。

赤ちゃんは、「日本人で良かった」とか、あるいは「日本人でなければ良かった」とか、「男が良かった」、「女が良かった」、そういったことは一切言わずに、丸ごと百パーセントの自分を引き受けて、この世に誕生してきます。お釈迦さまの誕生、そして赤ちゃんの「オギャー！」という泣き声は、まさに「天上天下唯我独尊」の叫びではないかと思います。

手も足も出ない世界

明治から大正、昭和にかけて生きられた大谷派の僧侶に暁烏敏（あけがらすはや）という先生がおられます。暁烏先生の言葉に「合掌は天上天下唯我独尊の表示である」（『暁烏敏　世と共に世を超えん　下』北國新聞社）、こういう言葉が遺されています。

私たちが合掌するその姿というのは、手も足も出ないということです。手も足も出ないということは、逆にいえば手も足も出さなくていいと、そういうことであると思います。「天上天下唯我独尊」とは、私は私として、良いも悪いも丸ごとひっくるめて、与えられた世界をイキイキと生きていく、与えられた世界をイキイキと生き切っていく、そういうことなんでしょう。

人生は、どんなことでも起こりうる。人間の側からすると「解らん、解らん…」、「なんで私が？」、「なんであの人が？」、「なんでこんなことが、この身に降りかかるんやろう？」と、そういうことの連続です。しかし、一方の仏さまは「どんなことでも起こり得るんだ」と、そういうことを教えてくださいます。仏さまは、この世のあらゆる出来事を「どんなことでも起こり得るんだ」と、その一点で、仏さまの大きな掌で想定してくださっています。人間の想定外は、仏さまの想定内の世界です。

仏さまの大地

私たち人間に許されるのは、「ああなったらいいなぁ、こうなったらいいなぁ」という未来の夢や幻を握りしめているその手を放すこと。いや、実際には人間の自我というのは、死ぬまで消えることはありませんので、人間にとってみれば夢の見通しなのですが、お釈迦さまが「諸行無常」と教えてくださった仏さまのはたらきによって、自分にとって都合の良い明日を握りしめたその手を「放せ放せ」と仏さまは呼びかけ続けてくださっているのでしょう。

仏さまは大地であると私は戴いています。

みなさん、大地より下に落ちることはできますでしょうか？

どんなに頑張っても、落ちるところはこの大地しかありません。「転がれ転がれ、この大地に転がっていけ」と仏さまの呼び声が聞こえてくるようです。昨日でも明日でもない、今ここを、「嗚呼(ああ)、そうやった」と、深いため息をつきながら生きていく…。私の計らいを超えて出てくる、このやむにやまれぬ〝深いため息〟こそが「天上天下唯我独尊」の声、仏さまから届けられた「南無阿弥陀仏」のお念仏なのではないかと私は戴いています。

人生いろんなことが起こります。良いも悪いも、人間の醜(みにく)さも丸ごとひっくるめて、「それがあなただ」と仏さまは、私を照らし出してくださいます。「嗚呼、そうやった。ナンマンダブツ、ナンマンダブツ」と、私は私を生きていく…。そういうことを、この花まつりをご縁に感じさせていただいたことです。

ご先祖を敬うこころ

企画調整局参事（現小松・大聖寺教務所長）　保木（もつぎ）　悦雄（えつお）

祖母との生活の中で

今回は、「ご先祖を敬うこころ」という講題でお話をさせていただきます。

皆さんには、ご家族の中で亡くなられた方はいらっしゃいませんでしょうか？

お爺さんやお婆さん、お父さんやお母さんなど、大切な家族が亡くなることは大変悲しいことですし、つらいことでもあります。また、亡くなった方はどこにいかれたのだろうか？　と心配し、不安になることもあるかと思います。

ですが、同時に、残された私たちはその命終えていかれた方の生きざまから、多くのことを教えられ、新たな気づきをいただくのではないでしょうか？

法事やお墓参りでは、あらためてご先祖を思い、感謝の気持ちで手を合わせます。そこには、亡き人を偲びつつ、私たち自身が仏様の教えに出遇うことが願われているのです。

今回は、私の祖母・お婆ちゃんのエピソードを紹介したいと思います。私の祖母は七年前に亡くなりました。百歳でした。祖母の性格は気丈夫で、たいへん頑固な性格でした。田舎のお寺で苦労しながら、お寺に一生を捧げたようなお婆ちゃんでした。

私は結婚と同時に、父から住職を譲り受け、お寺を継ぎました。その時、父は兼職しておりましたので、お寺のことはすべて祖母から教わりました。「誰誰さんと誰誰さんは親戚やぞ」とか、ご門徒の方や地域の方のこと、行事の準備や後片付けのことなど、すべて祖母から学びました。ですので、祖母にはたいへん感謝しております。そして、身近な家庭生活の中で、浄土真宗の教えに、気づかせてくれたのも、祖母でした。

草むしりには行かんでええ！

祖母の晩年は、認知症の症状が出始めていました。徐々に介護が必要となってきました。父は退職して、在宅で祖母の面倒を見ていました。在宅での介護というのは、いろんなことが起こり、家族にも負担とストレスがかかりますよね。私の家族にもいろんな出来事がありました。

ある天気の良い晴れた日、祖母は草履をはいて、外に出ようとしました。玄関には段差があり、足

元がおぼつかず、ヨロヨロと危なっかしい様子。

それを見つけた父が言いました。「おふくろ、何やっとるんやー！」と。

すると祖母は「何やっとるって、草むしりにいくんや！」と言いました。

そうしたら、父は「そんなことわかっとるわー！　外には出んでええ。草むしりには行かんでええ！　この前も外に出ようとして、転んでケガしたやないか！　そやから、外には出んといてくれ！」と、イライラして、声を荒げたのです。

そうしたら、祖母は、父に面倒をみてもらっているからか、何か言いたそうだったのですが、言えないもので、納得いかない顔で、父をジーッと睨（にら）みつけて、仕方なしに自分の部屋に帰っていくのでした。

お茶は沸かさんでええ！

また、こんなこともありました。ご門徒さんがお寺に来られて、祖母が応対した時のことです。待ってもらっている間に、祖母は台所に行って、なにやら「カチャッカチャッ、カチャッカチャッ」とやっているのです。

皆さん、何をしているか、わかりますか？　そうです、ガスコンロをカチャッカチャッと回して、ヤカンのお茶を沸かしているんです。

しかし、他の用事を思い出して、別のことをしだすと、さっきつけた火のことを、忘れてしまうのです。そうするとどうなりますか？　コンロの火はつけっぱなし！　お茶はグラグラと煮えたぎってきて、ジャーとふきこぼれてしまいます。センサーが反応して消えるといっても用心が悪いですよね。こんなことが何回もありました。

なので、それを父親が見つけた時、こう言うんです。「おふくろー！　何やっとるんやー！」と。そうしたら、祖母は「何やっとるって、お茶、沸かしとるんや！」と。

父は「そんなことわかっとるわー！　コンロは触るな。この前もガスをつけっぱなしにして危なかった。頼むからコンロには触らんといてくれ！」と、また声を荒げたのです。

そうしたら、祖母は、また、父をジーっと睨みつけて、納得のいかない様子で、自分の部屋に戻っていきました。このような口ゲンカが度々ありました。

私を叱らんといてくれんか！

そんなある日、ちょうどその日は、敬老の日でした。家族一緒に台所で、昼ご飯を食べていた時のことです。

父が「なあ、おふくろ、今日は敬老の日や。何か欲しいものはないか？　欲しいものあったら何でも買ってやるぞ」と祖母に尋ねました。敬老の日なので、今日はちょっと、親孝行しようかな、と思ったのかもしれません。

そうしたら、祖母から、思いがけない言葉が返ってきました。

「わたしゃ、なーんもほしいものはない！　ただ、一つだけ、お願いがある。この私を、叱らんといてくれんか！」と、ハッキリと大きな声で言ったのです。

家族はびっくりしました。そして私は、あーっ、そうやったのかー。と気づかされました。

この「叱らんといてくれんか！」という言葉は、祖母の本音です。言い換えれば、「いのちの叫び声」です。普段から、草むしりはするな、お茶は沸かすなと、叱られ、押さえつけられて、つらい思いを我慢していたのが、噴き出したのです。

草むしりやお茶沸かしは、祖母が毎日ずーっとこれまでやってきた仕事であり、生活そのものでした。それをするなと言われたら、自分のいきがいが奪われたのと同じです。自分の居場所がなくなる

んです。自分の居場所がなくなれば人間は生きていけません。祖母の居場所をなくしていたのは、私たち家族だったのです。

だから、「この私を叱らんといてくれんか！」という言葉は、「私はいま、ここに、生きている」という事実を、まるごと認めてほしい、といういのちの叫び声なのです。それは老いも若きも問わないで、人間を丸ごと包んで引き受ける、いのちそのもののはたらきです。私にはその声が、如来からの呼びかけと重なって聞こえました。

摂取不捨と慚愧

親鸞聖人の和讃に、「十方微塵世界の　念仏の衆生をみそなわし　摂取してすてざれば　阿弥陀となづけたてまつる」（『真宗聖典』四八六頁）とあります。仏様の世界は、誰一人として見放さない、選ばず、嫌わず、見捨てずの世界ですよ、と示されているのです。

私は、「お婆ちゃんを厄介者扱いしていたなー、申し訳なかった」と、深く気づかされました。そして、父と一緒に、「お婆ちゃんゴメンね」、と謝りました。

このように、祖母は、阿弥陀仏の摂取不捨の心、すなわち慈悲の心を、私に教えてくれたのでし

た。そして、その仏様の慈悲に気づかないでいる、愚かな凡夫の姿を知らされ、申し訳なかった、という慚愧の念が起こりました。慚愧とは、深く自分自身を恥じ入る心です。この慚愧が人間の心を回復していく、大切な心ではないかと思います。

亡き人からの深い願い

「亡き人を案ずる私が　亡き人から案じられている」という言葉があります。

案ずるということは心配するということです。亡き人を心配する私が、亡き人から心配されている。ご先祖を偲ぶこころの奥底に、もうすでにして、亡き人から深い願いがかけられてあるのです。

浄土真宗においては、亡くなられた方は、私に先んじて生老病死の事実を、身をもって、この私に、示してくださった仏様であると受けとめます。ありのままのいのちの事実を、まるごと引き受けて生きよと、教えてくださっているのです。

その深い願いに促されて、念仏を申し、わが身に与えられたいのちを、精一杯生きることが、私たち真宗門徒の生活ではないでしょうか。

以上、私の法話とさせていただきます。

疫癘（えきれい）の『御文』について

教学研究所所員　武田（たけだ）　未来雄（みきお）

死を目の前にした時

私たちは普段、死を遠ざけたり、忘れたりしているから、生の意味についても考えないのではないでしょうか。逆に死というものを身近に感じれば、生きていることの実感や有り難さを感じることができます。仏教ではそのように、生と死というものを同時に考え、逆に死から生というものの意味について学んできたわけであります。

しかし、多くの人が亡くなるような大災害や病気の流行などによって、死を否が応でも見せつけられた時、驚きや不安など、さまざまな感情が起こります。そして平静の心の状態では居られなくなります。そうした時には自分を守ろうとするために、他者を排除したり、差別するというようなことも起こってくるのではないでしょうか。そうした時に社会の分断も出て参ります。

そのような多くの人の死を目の前にして、平静を失っている時に、どうしたら正しく死を受け入

れ、生を見つめることが出来るのでしょうか。そのためには、自分は孤独ではなく、さまざまな他者との関わりがあること、また自分は常に願われて存在していることが教えられ、知らせていただくことが大切になってくるのではないかと思います。

疫癘の『御文』

そうしたいのちの危機に面した人びとに対して書かれた蓮如上人の『御文』に「疫癘の御文」と呼ばれるものがあります。

そこで今回はこの「疫癘の御文」をとおしながら、人と生まれた意味について考えていきたいと思います。

当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。

（『真宗聖典』八二七頁）

この御文は、「当時このごろ、ことのほか疫癘によって人が死去する」との言葉からはじまります。疫癘とは疫病、はやり病のことです。この文の奥書には「延徳四（一四九二）年六月」という日付が記されています。この年は疫病が蔓延し、多くの方が亡くなり、本当に悲惨な年でありました。僧侶が集められて祈祷が行われたり、人びとの平安を願って元号が改められたりしたと言われています。

そのような人びとが動揺する中で、蓮如上人の門弟である法敬房順誓（ほうきょうぼうじゅんせい）は、疫病によって苦しむ人びとにどう対応すればよいかを上人に尋ねました。それに対して書かれたのがこの「疫癘の御文」です。上人は、法敬房にこの御文を与え、疫病のために苦しみ、悲しみにくれる人びとに読み聞かせ、念仏の教えによる救いというものを伝えていくように勧められたということです。

「生まれはじめしよりしてさだまれる定業（じょうごう）」について

私たちは、ともすれば直接的な死の原因に目を奪われてしまい、死について納得がいかなかったり、なかなか受け入れたりすることが出来ないということがあります。たくさんの人が一度に亡くなるので、前世に悪いことをしたのではないかとか、これは非業（ひごう）の死を遂げたなどと思われる場合もありました。特に当時はそうした思いをもつ人が多く、また疫病によって死ぬ人は成仏が出来ないのではないかと疑う人も居たようでした。

だから蓮如上人は次のように言われました。

これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業なり。

（同前）

と、疫病によって多くの人が亡くなったが、これは決して、「疫病によってはじめて死ぬのではない」と言い、その理由は「生まれた時から定まっている業の報いなのです」と言われます。

では、この「生まれた時から定まっている業の報い」とはどういうことでしょうか。定まっている業とは、生まれる前からの業の因縁によると伝統的に解釈されています。しかし、今このような言葉を聞きますと運命論のようにも思われるかもしれません。

蓮如上人が言おうとされていることは、自分が納得できない死とどう向き合うべきなのかということであると思います。

私は、この「生まれはじめしよりしてさだまれる定業」とは、「人間は生まれたら必ず死ぬ」ということを表していると受けとめます。

例えばこのようなやり取りがあります。「人はなぜ死ぬのでしょうか」と尋ねられると、病気や事故などのさまざまな原因を思いおこすでしょう。でもその答えは「生まれたこと」なのです。つまり、人が死ぬという事実の究極的な原因は「生まれたから」ということなのです。私たちはこの世に生を受け、生まれた限り、必ず死ななければなりません。そのことは決して取り消すことの出来ない事実であるのです。

蓮如上人がここで言おうとしていることは、「人は生まれた限り必ず死ぬ」との、いのちにおける道理であると思われます。人は、いずれは誰もが死ぬのですが、疫病のような通常では考えられないような死に方をする。しかも老人や大人だけではなく、若い人や子どもであっても亡くなるのです。ですから、まるでそれは起こってはならないこと、何かの間違いが起こったかのように思われたりします。しかし、人はどのような死に方をしても同じなのです。そのことを蓮如上人は、「さのみふかくおどろくまじきことなり（さほどおどろくべき事ではありません）」と言われました。人が亡くなるとは道理であるということです。人はこの世に生まれた限り、誰もが死ぬ。それは老いも若きも、善人も悪人も選ばれないということを言われているのです。

人情に寄り添う

しかし、どれだけ「生まれた時からの定めとして人はいずれ死ぬ」と言われましても、人はなかなかその事実を受け入れることは出来ません。だから蓮如上人の教えは単に無常の道理を伝えるだけでは終わらないのです。次に、

しかれども、いまの時分にあたりて死去するときは、さもありぬべきようにみなひとおもえり。

「そうではありますが、今の時分にあたって人が死去すると、きっと伝染病によって死んだに違いないというように人はみな思います」と言われます。このように定業とはいっても、やはり納得できない人情というものがあるのでしょう。だから蓮如上人は人の心に寄り添って、教えを説いていかれるのではないかと思います。

（同前）

このような人情に寄り添っていく上人の説き方は他の『御文』でも見られます。例えば、法然上人の「浄土を願う人は、病気を得てこれを楽しむ」とのお言葉を紹介しながらも、なかなか病気を喜べない自分がいるとも言われます（『御文』第四帖十三通『真宗聖典』八二九頁）。上人は、道理としては正しいことであっても、それを受け入れることの出来ない私たちの在り方もお知りになり、教えを説かれているわけです。そのように上人は私たちの実状に寄り添うような形で、弥陀の本願の救いを説かれるのです。

阿弥陀仏の仰せ

そこで次に『御文』では本願念仏の大悲が語られます。

これまことに道理ぞかし。このゆえに、阿弥陀如来のおおせられけるようは、「末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」とおおせられたり。

（同前）

上人は「これこそは本当に道理であるのだよ」と言って、疫病によって亡くなるのは非業の死であり、成仏できないと不安に思う人に、阿弥陀仏の本願の救いがあることを明らかにされました。悲しみに沈み、苦しむ者をこそ救おうというのが本願念仏との、まことの道理を伝えようとされたのです。

そのお言葉は「末代に生きる凡夫の罪業がどれほど深くとも、『われを一心にたのみとする衆生を必ず救おう』と阿弥陀仏は仰せられたのです」というもので、それはまるで阿弥陀仏が私たちに呼びかけているように述べられています。これは『御文』が「如来の直説（じきせつ）」（『蓮如上人御一代記聞書』『真宗聖典』八七八頁）だといわれる理由でもあります。

『御文』の言葉は、どれだけ罪が深くとも、必ず救おうとの阿弥陀仏の大悲の本願のお言葉を伝え、悲しみに沈む人と同じ大地に立ち、苦しんでいる人びとに寄り添って呼びかける阿弥陀仏のすがたを伝えてくれています。

こころのよりどころ

かかる時はいよいよ阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、極楽に往生すべしとおもいとりて、一向一心に弥陀をとうときことと、うたがうこころつゆちりほどももつまじきことなり。かくのごとくこころえのうえには、ねてもさめても、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏ともうすは、かようにやすくたすけまします、御ありがたさ、御うれしさを、もうす御礼のこころなり。これをすなわち仏恩報謝の念仏とはもうすなり。あなかしこ、あなかしこ。

（『真宗聖典』八二七頁）

蓮如上人は、このような阿弥陀仏の本願による呼びかけがあるので、何の疑いもなく、一心一向に阿弥陀仏を深くたのんで生きるように勧められます。また南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏を申すのは、私たちがたすかっている有り難さ、うれしさを表す言葉であることを明らかにしてくださっているのです。

このように『御文』を読みますと、いかに私たちが、普段たよりにしているもの、これがあれば大丈夫と思っていることがたよりないかということが教えられます。つまり、人間の力を超えた災害や疫病の脅威を前にすれば、私たちの信じていたものがもろく崩れてしまうことが教えられるわけで

す。ですから、そういう動揺する私たちだからこそ救おうとする、阿弥陀仏の本願の願いがあると、お念仏の呼びかけがあるということをこの『御文』は伝えてくださっているのではないかと思います。常日ごろ称えているお念仏が平静を失った時にこそ、心のよりどころとなることを、ここで明らかにしてくださっているのではないかと思います。

これで法話を終えたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

信心と大衆心理

教学研究所研究員　中山（なかやま）　善雄（よしお）

大衆への同調と孤独

本日は「信心と大衆心理」という題でお話しさせていただきます。

一昨年、ＮＨＫの『100分de名著』という番組において、オルデガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』（寺田和夫訳、中公クラシックス）という書物が取り上げられていました。そこでは、大量消費社会の波に洗われ、根無し草のように浮遊する大衆の姿が紹介されていました。自らの根を失った大衆は他者の動向にのみ注意を払い、「皆と違う人、皆と同じように考えない人は排除される危険性にさらされる」（前掲書第一部参照）という言葉が紹介されており、印象に残りました。それは今日なお深まっている傾向であり、私たちは大衆の動きに同調しつつも、その大衆の一人ひとりと本当に出会うことのない、孤独な在り方に陥（おちい）っているように思われます。

それゆえ本日は、浄土真宗における信心と、大衆心理との関わりについてお話ししたいと思います。

信心の課題――畏れを超える

親鸞聖人が、浄土真宗の祖師として仰いでおられるお一人に龍樹菩薩という方がおられます。親鸞聖人がおつくりになられました「正信偈」には、この龍樹菩薩が明らかにされたことを讃えて、「歓喜地を証して、安楽に生ずる」（『真宗聖典』二〇五頁参照）とうたわれています。この歓喜地と申しますのは、仏道を歩むことから再び退くことがないという出発点を表します。その出発点を得た喜びが深いので、歓喜地と名づけられております。

親鸞聖人は、浄土真宗における「信心」とはこの歓喜地を得ることであると『教行信証』などで記しておられます。それでは、その信心というのは、なぜ退くことのない歩みを私たちに与えるのかという問いが起こります。

その問いを考えるに当たってまず、龍樹菩薩が『十住毘婆沙論』という書物の中で、歓喜地を得れば、次の五つの畏れを超えることができるとおっしゃっていることに着目したいと思います。

1　不活の畏れ（生活できなくなることへの畏れ）

2　死の畏れ（自分の存在が死によって消えていくことへの畏れ）

3　悪道の畏れ（悪しき境遇に陥っていくことへの畏れ）

4　大衆威徳の畏れ（大衆から責められることへの畏れ）

5　悪名の畏れ（自分が悪人視されることへの畏れ）　（『十住毘婆沙論』「地相品」参照）

例えば、最後の悪名の畏れを取り上げますと、自分の名が悪く言われ軽蔑されるような評価を受けることを畏れるのです。

そして四つ目の大衆威徳の畏れ（大衆への畏れ）はそれと関わり、大衆から自分が悪人として評価され、居場所を奪われることを畏れるのです。このことが、今回問題とする大衆心理ということと関係してきます。大衆から悪の評価を受ければ居場所を失うので、大衆の価値観において「善」である自分を装っていきます。畏れが深いほどに善人であることを求め、集団に同調していくのです。

そして死の畏れ、これは死によって「私」が消滅していくことへの畏れです。他の四つの畏れは、この死の畏れと結びつくのですが、その本質は、この「私」という自我が、壊され、消えていくことへの畏れです。

畏れと我執

仏教は、この「私」という自我を立てて執着すること、つまり我執が苦しみの原因であると説きます。

龍樹菩薩は、「一切の怖畏は皆、我見より生ず」（『十住毘婆沙論』「地相品」）、つまりすべての畏れは我執、「我あり」という我見、つまり迷いの見解から生ずるというのです。無論、経済や公衆衛生等の観点から、危険なことを察知し対策を取ることは不可欠であるのですが、私たちの問題として、本当に畏れるべきでないことまで畏れてしまうということがございます。その問題がこの我執と関係してまいります。

考えてみますと、私たちはこの「私」というものを自明のものとしておりますが、そこには何らの根拠もございません。それゆえ仮の根拠として、他人からの評価や世間における地位や業績によって、何とか「私」というものを確かなものにしていこうとします。ところがそれは、あたかも蜃気楼を掴もうとするようなものです。そして、自分で立てた幻の「私」が、人から悪い評価を受けたりすることによって崩れていくことを畏れるのです。

我執のもたらす利用関係の生

この我執の問題が私たちの生活においてどのように表れるのかと申しますと、あらゆるものに対して利用関係しか結ぶことができないという形で表れてまいります。我執に立つ限り、全ての関係はこの「私」がより善い評価を得るために利用できるか、できないかという思いではかられてまいります。つまり今日の言葉で申しますと、全てのものを、自尊心を満たすための利用手段とするのです。

例えば、家族や友人でさえも、自分の弱いところを浮き彫りにさせる発言や行動をすれば、つまり自尊心を傷つける存在であれば、遠ざけるべき存在となります。逆に自分のことを誉める人や能力や地位のある人など、自尊心を満たすために利用できる存在であれば仲間として迎え入れます。

そして悲劇は、この我執は自分の身でさえも自尊心の利用手段としてしまうことです。この「自分の身」と申しますのは、我執の思い描く「私」という自我ではなく、与えられたこの事実の身のことです。自分の身が、自尊心を傷つけるような弱く情けないものであれば自分で嫌悪していきます。あるいは、今ここの時と場を、未来の自分を確かなものとするための利用手段としてまいります。それが、将来への畏れと不安を生む一つの要因となります。我執を依り処とする限り、我が身ひとつでさえも利用手段としていき尊重することができないのです。

それゆえにこそ、世間で軽蔑されるような自分が露呈（ろてい）することを畏れ、そうならないように集団に同調し大衆の動向に翻弄されるということも起こってまいります。龍樹菩薩が、畏れのもとに我執があるとおっしゃるのは、こういう道理に基づいております。

畏れを超えさせるもの

私たちは、畏れを超えて大衆に翻弄（ほんろう）されないことを求めるというと、確固たる自分の信念と勇気を

もたなければならないように思ってしまいます。しかし私たちは、その強い確固たる自分であることを求めて、畏れと大衆心理に絡(から)めとられていくのです。

畏れと大衆心理の中で踏みとどまることの原点は、我執に基づく利用関係しか結ぶことができない、自分自身の冷たさと愚かさへの自覚であり、悲しみです。そして、この自覚と悲しみこそが浄土真宗における信心であるのでしょう。

その悲しみを私たちに与えてくださるのが、阿弥陀如来の本願、阿弥陀如来の大悲の願です。すべてのものを利用対象としてしまう私たちの底しれない我執を痛み悲しむ心から、阿弥陀如来は本願を起こされました。それは私たちに対して、利用する関心しかもてないことの痛ましさに気づき、自分も他者の存在も尊び喜ぶものになってほしいと願いかけています。その如来の大悲の願いが私たちに至り届くことにより、私たちの内に自らの在り方を悲しむ心が生まれます。

その悲しみにおいて初めて私たちは利用関係を超え、そして善い自分であることを求めて大衆の動向を畏れ流されていくことを超えていくことができるのではないでしょうか。阿弥陀の大悲によって与えられた悲しみにおいて、人として生まれた我が身を愛する喜びと、この世界に友を見出し、人を愛する喜びを知る。それが利用関係と大衆への畏れを超えるということに他なりません。そしてま

た、それが歓喜地、信心の喜びであろうと思います。この悲しみと喜びゆえに、大衆への畏れに再び自分を委ねてしまうことがないのです。はじめに申しました、信心が退くことのない歩みを獲得する仏道の出発点であるということの具体性はここにあります。

微かな悲しみと割り切れなさに呼びかけられる

如来の大悲の願いは、途切れることなく私たちに呼びかけています。その呼びかけは、慌ただしい日常の中にも、ふと私たちが感ずる、利用関係に対する割り切れなさや悲しみとなって私たちの身に至り届いています。そしてそのような身の感覚となって、内から私たちは呼びかけられているのです。それは非常に微(かす)かであり、世間の中ではかき消されてしまいがちです。けれども、その微かな割り切れなさや悲しみを尊び、そしてその悲しみのもとにある阿弥陀如来の大悲を聞き開くことが大切です。

溢れる情報と激しい速度で進んでいく世間の中にあって、私たちの内面は擦(す)り減ってしまい、ほとんど、大衆社会の操り人形となりかけているように思われます。どんなに小さく個人的なもののように思われましても、微かな割り切れなさや悲しみこそが、畏れを超えていく歩みの根拠であることをお伝えし、法話を終わらせていただきます。

ご本尊

企画調整局参事　橋本（はしもと）　真（しん）

お寺と本尊

みなさん、こんにちは。新型コロナウィルス感染症の影響によって、さまざまな不安や、悲しみ、閉塞感をお感じになっておられることと思います。

その中でこそ、あらためて教えを聞いていくことを大切に念じ、お話をさせていただきます。

今回のテーマは、「ご本尊」です。

文化庁の『宗教年鑑』によりますと、全国に存在する仏教系寺院の数は七万七千余とあります。よく言われることですが、コンビニエンスストアの数が五万八千ですから、その三割増くらいでしょうか。

歯科医院の数が六万八千、二十床未満のクリニックの数が十万一千ですから、街中で見かける歯医者さんの数よりも多く、クリニックよりもちょっと少ないくらいお寺があるということになります。

この七万七千のお寺は宗派や規模の大小などさまざまな違いがありますが、共通していることは、

ご本尊がある、ということです。ご本尊として、釈迦如来、お釈迦さまですね。薬師如来、大日如来、毘盧舎那仏、観音菩薩・救世菩薩、弥勒菩薩などがよく安置されています。

また、「本尊」という時には、「守本尊」などが思い浮かぶ方もおられるかもしれませんが、どうでしょうか。

ご本尊とは、その寺院、あるいは御堂の中心となるものです。そして中心となるということは、そこにかけられた「願い」と、そこにある「教え」を象徴するものです。例えば、薬師如来が本尊であれば、病に苦しむ人びとが救われて欲しいという願いと、病から救われることをとおして人生全体に救われていく仏の教えがあらわされているでしょうし、観音菩薩であれば、「救世」ですから、さまざまな人びとを脅かす苦しみがなくなり、世間全体が救われていくことを願い、その道を教え伝えるということでしょう。その教えは仏道を修めようとする出家の僧侶にとっては実践すべき姿として受けとめられ、その願いは、参拝する人びとにとってはご利益として受けとめられているのでしょう。また、大日如来を本尊とするということは、宇宙の真理そのものだと言われますから、真理の体得が願いとしてあり、そのために修行していくという教え、道があるのでしょう。

中心にある

願い　教え

それぞれ、願いの方に重きが置かれていたり、教え・実践に重きが置かれていたりしますが、本尊とは、その場所がどういう願いの場所であり、どういう教えを受け、実践していくかを象徴的にあらわすものと言えます。

阿弥陀如来一仏（いちぶつ）

宗派によっては、さまざまな本尊が安置されるところもありますが、浄土真宗の寺院は、阿弥陀如来一仏を本尊といたします。その他の仏さまや菩薩を本尊とすることはありません。それでは、阿弥陀如来が本尊であるということはどういうことを願い・教えとして象徴しているのでしょうか。

阿弥陀如来

A-mita-ābha
ア・ミタ・アーバ ＝ 無量光（ひかり）

A-mita- āyus
ア・ミタ・アーユス＝ 無量寿（いのち）

阿弥陀とは、古いインドの言葉を音だけとったもので、これを音写と言います。もとの言葉は、アミターバ、もしくはアミターユスと言います。分解すれば、ア・ミタ・アーバ。もしくはア・ミタ・アーユス。アとは否定の接頭語。ミタとは、はかる。アーバは「光」。アーユスは「いのち」をあらわします。ですから、その意味をとれば、阿弥陀とは、「はかることのできない、さえぎるこ

とのできない光の仏、限りない無量のいのちの仏」ということになります。簡潔に言えば、「無量光の仏」であり「無量寿の仏」ということです。この二つはそれぞれ、阿弥陀如来の「はたらき」と「本体」をあらわしていると言われます。

私たちは光の存在を知る時は、かならず何か照らされるものによります。例えば、風。みなさんは風の絵を描いてみてくださいと言われたらどのように描きますか？　漫画的表現であらわすことはあっても、風そのものを描くことはできないのではないでしょうか。では、風を描くことはできないか、というと、簡単です。風になびく鯉のぼりをかけば、そこに風が描かれます。このように、光も何かが照らされることによってその存在をあらわすので、「はたらき」というのです。そして、寿命無量が本体であると。

光＝はたらき
寿＝本　体

このことをふまえて、もとの、願いと教えにかえしていけば、阿弥陀如来を本尊とするということは、はかることのできないそれぞれのいのちの深さを大切にし、そのことを知らせてくる私へのはたらきかけを受け逃さず、見逃さずにいてほしい、もしくはそうでありたいという「願い」と、その実践として阿弥陀の名を呼び続ける、すなわち南無阿弥陀仏と念仏を申し続けるということが「教え」としてあります。

いのちの深さからの呼びかけ――「はたらき」にふれる

いのちの深さからのはたらきかけを大切に、というと、そんなことはいちいち言われなくても、一度聞けばわかることだし、そんなものより、病気といった困っている状況が改善されることや、もっと優先しなきゃならないことがあるんじゃないか、という声が聞こえてきそうです。しかし、はたしてそうなのでしょうか。

ここで私は、十五年前の公共広告機構（現：ACジャパン）のCMを想い起こします。覚えておいでの方もおられると思いますが、こういう言葉でした。

命は大切だ。
命を大切に。
そんなこと何千何万回言われるより
「あなたが大切だ」
誰かがそう言ってくれたら
それだけで生きていける。

（ACジャパン　二〇〇五年度）

当時、賛否両論の言葉だったようですが、私には非常に大切な実感を語っているように思われま

す。「命は大切だ」という言葉を、頭ではわかっているのです。しかし、どうしてそれを直接言葉にして投げかけられなければ、生きていく力にならないのか。それは、「理解」と「実感・体感」は別物だということでしょう。実は、いのちとは何であるか、そしてそのいのちを大切にするとはどういうことであるか。わからないまま、自明のことにして理解しているつもりになっているのではないでしょうか。

評論家の芹沢俊介さんが、相模原障害者施設殺傷事件について語られる中で、いのちの優劣という問題について、自身の体験を語っておられました。芹沢さんにお子さんが生まれる時、自分としては男でも女でもいい、常々そう思っていたそうです。そこでよくあることとして、友人から「男・女どっちがいいんだ?」と聞かれた。常々思っていたことですから、「どっちでもいいよ」と即座に答えたら、その友人が「五体満足無事ならね」と返したそうです。

おそらく友人には全く悪気も恣意的なものもなかったのでしょう。けれども、その言葉から自分の中にある無意識のものに気づかされた。ハッとさせられたというのですね。子どもが生まれてきて、医師や看護師から「特に何も言われなかったら安堵(あんど)がある。これはどうしようもない」と語っておられます。

実は、私たちの心の奥底には、「皆そうだよ」「そう思うのは当然だ」と言いながら抱く「五体満足無事に生まれてきて欲しい」という願いの下に、私の都合に合わせようとする〝ものさしの私〟がいるのではないでしょうか。子どもをむかえる芹沢さんが、友人とのやり取りの中で、見せられてハッとしたのは、そのものさしの自分の姿だったのだと思います。ハッとさせられる、ということは、頭ではいのちの大切さを理解しながらも、そのことが本当に見えていなかった自分自身を知らされたということでしょう。これこそ、はたらきにふれた姿ではないでしょうか。

ものさしを超えていく道

いのちの大切さを見失ったものさしの眼は、私自身にも向かいます。元気で仕事もバリバリできて、収入もあり、社会的地位もある時には、気になることはそうないのかもしれません。けれども、体は時と共に衰え、老い、あるいは健康を害し、仕事も思うようにはならず、尊敬されるどころか、世間との関わりも薄くなっていく。そんなことは、限られた人のみのことではなく、誰にでも起こってくることでしょう。その時、私たちは自分のものさしに抗(あらが)う術をもちません。ずっと大事にしてきたものさしで、変わらず私をはかり、自分にとって自分が一番つまらないものになってしまいかねません。

ものさしを超えていく道、それは、いのちの無限の深さ、尊さを、いのちそのものが名となって呼びかけ教え続ける道と見出したのが、親鸞聖人の仏道、浄土真宗です。

浄土真宗の本尊は阿弥陀如来と言いましたが、詳しく言えば、南無阿弥陀仏です。なぜ、「南無」がつくのか。南無とは、頭を下げる、頭が下がるという意味です。つまり、この私の頭が「見えていなかったのは私であった」と下がるに先立って、同じように自身の眼のあてにならないことを教えられ、気づかされ、受けとめられた数多の人びとがおられたということです。個々人の性根の良し悪しではなく、私たちの根底には、あらゆるものを利用存在にしようとするものが横たわっています。それこそ、この私を成り立たせている自我意識に他なりません。その自我意識を打ち破って、「ああ、見えていなかったのは私だった」と頭が下がるところに開かれるものは、先立って頭を下げた無数の人びとの姿です。その歴史こそ、私に呼びかけはたらく、いのちの無限の深さそのものであります。

南無阿弥陀仏とご本尊に手を合わせ、日々をおくる中に、この私自身のいのちを、良し悪し、長い短いをこえて、大切なもの、尊いものとして、たしかに受けとめていく道があるのだといただくことです。

御視聴ありがとうございました。南無阿弥陀仏。

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

教学研究所研究員　難波（なんば）　教行（のりゆき）

はじめに――人と生まれたことの意味

親鸞聖人がお生まれになってもうすぐ八百五十年が経とうとしています。また、立教開宗からは八百年になります。ちょうどその年にあたる二〇二三年には、そのことを慶び讃（よろこ　たた）える「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃（きょうさん）法要」を執り行います。この慶讃法要にあたり、親鸞聖人の御誕生と立教開宗の意義を、現代において確かめるために、次のテーマが設けられました。

南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう

今日はこのテーマによって、私自身が教えられ、考えさせられることを、親鸞聖人のお言葉をとおして、お話ししたいと思います。

この慶讃テーマは「南無阿弥陀仏」という言葉から始まっています。「南無阿弥陀仏」は「阿弥陀仏に帰依する」という表明でもありますが、阿弥陀仏の方から私たちへ呼びかける言葉でもありま

す。それは「誰とも比べることの必要ない阿弥陀仏の浄土に生まれたいと願いなさい」という呼びかけです。親鸞聖人はその意味で、「南無阿弥陀仏」の名（みな）を称える「称名」というだけでなく、聞くもの、すなわち「聞名（もんみょう）」として受けとめておられます。

「南無阿弥陀仏」から始まるこのテーマを耳にして、まず思い浮かんだのは、日頃、私は「意味」を求めることばかりしているけれども、「南無阿弥陀仏」という呼びかけを聞くことをとおして、人と生まれたことの意味をたずねていないのではないか、ということです。ですから、私にとってこのテーマは問いかけてくる言葉でした。

日常を振り返ると、私はできるだけ苦しみや弱さを少なく、楽なことや強さを多くするよう、過ごしているのではないかと思います。自ら苦しい道を選ぶことも時としてありますが、それも将来の楽さや強さへの投資という意味においてでしかないように思います。それ自体が本当に私自身の願いかどうかもわからないままに、優劣や能否、美醜といった基準によって序列化される世俗的、社会的な価値観を頼りに生きているのではないかと思われてきます。もちろん社会的価値観は社会生活を送る上でなくてはならないものです。しかしそれだけでは、社会的な地位や財産、貢献度といったものを、人として生まれた意味であると見誤るのではないでしょうか。

相模原障害者施設殺傷事件と秋葉原通り魔事件

このようなことが顕在化したことの一つに、二〇一六年に起こった相模原障害者施設殺傷事件があります。大型障害者施設に入所していた十九人の方々の命が奪われ、二十六人の方々が重軽傷を負った大事件です。元施設職員の犯人は、事件前に「障害者を殺すことは不幸を最大まで抑えることができる」などと述べており、人と生まれた意味を、社会的な貢献度などで量り、「生きるべき／死ぬべき」と線引きをしていることがうかがわれます。

また、二〇〇八年には秋葉原通り魔事件と呼ばれる事件が起きました。犯人はトラックで歩行者天国に侵入し、人をはね、その後トラックから降りて歩行者を殺傷しました。この事件は一見、無差別殺人のようにも見えます。しかし犯人が述べたと言われる「勝ち組はみんな死ねばいい」という言葉から推し量るなら、社会的地位が高いとされる人びとに対して、反感を抱いていたと考えられるでしょう。人間を「勝ち組／負け組」といった区分をして、自らの存在の意味を見出すことができなかったのではないでしょうか。

どちらの事件も、社会全体がそうした価値観を強く推し進め、社会における「意味」にがんじがらめにされる中で起こってきた事件だと感じられます。

十九歳の夏

こうした事件は大きく報道され、注目もされますが、私たちの身近なところにも人間を区分けし、差別を生み出していくような社会的価値観に縛られている事柄は少なくないように思います。私自身のことで言えば、十九歳の夏の出来事が思い出されます。

私は幼少期に身体のコントロールを失う「ジストニア」という難病にかかりました。手や足、首などが意思に反して勝手に動いてしまう病で、成長するにつれ、字を書いたり、歩いたりすることができなくなっていきました。高校生の頃には、学校でイスに座っているのも困難になりました。

一番身体がつらかった十九歳のある夏の日――。私は震える身体で電車に乗り込みました。車内は混んでおり、私はつり革を頼りになんとか立っていました。すると、そのことに気づかれたある年配の女性の方が声をかけて下さったのです。

「こっちに来て座りなさいよ。」

その方はそう言って席を譲って下さったのです。私の身体にとって大変ありがたい言葉でした。しかし同時にこうも思ったのです。

「僕が席を譲る立場でいたかった――。」

私自身が、席を譲られるような弱い者であることがイヤだったのです。身体のつらさの軽減より、社会的に役立ちたい、強い者でありたいということを、疑うことなく求めている在り方です。

そこには、そのように思わせてしまう、社会に共有される価値観の問題とともに、私自身ができることや強いことだけに「意味」を見出し、その「意味」に縛られているということがあるように思います。

私はその後、二十歳で脳の手術を受け、大幅に症状は緩和されました。そのおかげで、できることは確かに増えました。しかし、今度はできることを誇り、そこに「意味」を見出していきます。まさに社会的価値観の中で一喜一憂している有り様です。

仏の視点を賜る

このような有り様は、先に述べた事件や、私だけのことではきっとないでしょう。誰もが社会的価値観の中で、時に喜び、時に悲しんでいるのではないでしょうか。そうした私たちに、もう一つの視点、言わば「仏教的価値観」を与えてくれるのが、南無阿弥陀仏の教えではないかと私は受けとめています。

しかし、「南無阿弥陀仏」を称えたら仏教的価値観が私の視点になる、ということではありません。

そのことでご紹介したいのは、かつて『同朋新聞』に掲載された東京大学先端科学技術センター教授の福島智（ふくしまさとし）先生の言葉です。

福島先生は、僧侶の田口弘氏との対談で、こう述べておられます。

例えば地面にアリの行列があって、前のアリより後ろのアリがだめだとか、自分より前を歩いているアリの方がいいんだみたいな数直線状に人間を並べているようなものです。そんな人間観が世の中にある気がして、すごくおかしいと思っています。

前後に並んでいるアリが大事なのではなく、上から見れば皆同じアリです。そういう「上」との関係が大事なのであって、その関係を気づかせるのが私の言葉では宇宙であり、田口さんの言葉では、仏なのだろうと思うのです。

（『同朋新聞』二〇一七年三月号）

ここでアリに例えられているのは、比較や序列によって一喜一憂する人間の在り方と言えます。一方、福島先生が「宇宙」という言葉で、上から見る視点を示しているのは、仏の視点です。私たちは仏の視点を保有し、自分の姿を上から見ることは決してできません。どこまでも私たちの在り方を見られるというかたちで、仏の視点を賜るのです。

信心の天が照らし出す雲霧

この視点は信心において賜ると言って良いですが、親鸞聖人は信心を『正信偈』において、「真実信心の天」という言葉で表しておられます。「天」は現代的に言えば、「宇宙」と言えるでしょう。「信心の天」と端的に示されるように、私たちがつかみきれるようなものではなく、どこまでも私たちの在り方を照らし出すものとして表現されています。

今、その一節を拝読したいと思います。

摂取の心光、常に照護したまう。　すでによく無明の闇を破すといえども、
貪愛・瞋憎の雲霧、　常に真実信心の天に覆えり。
たとえば、日光の雲霧に覆わるれども、雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし。

（『真宗聖典』二〇四～二〇五頁）

仏の光は常に照らして下さっている。その光は、真実の智慧に暗く分別してやまない私たちの闇をやぶる。ところが、煩悩の雲や霧は真実信心の天をいつも覆っている。しかしそうであるけれども、曇りの日も真っ暗ではなく明るいのと同じように、仏の光は至り届いている――。このように『正信偈』では詠われています。

何にでも序列を生むような社会的価値観に縛られている私たちは、南無阿弥陀仏の教えにふれたからといって、比較や序列を問題としない人間にはなりえません。しかし、仏の光に照らされることによって、煩悩の雲や霧こそが明らかとなります。つまり、世俗的な社会的価値観に縛られている姿が明らかになっていくというかたちで、仏の視点を賜るのです。

おわりに――自らと他者が見出される視点

人間が考える「意味」では、役立つ者、強い者などだけが尊重され、そうではないものには「意味」がないと、比較や序列が生まれます。ともすれば私たちは、それを人と生まれた意味とまで考えてしまいます。しかし、「南無阿弥陀仏」の呼びかけを聞くところから「人と生まれたことの意味をたずねる」ことによって、社会的価値観における「意味」ではない、仏教的価値観を賜るのだと思います。そこにおいて自らも他者も、社会的な地位や貢献度などでは量りえない大切な存在であると見出されてくるのではないでしょうか。

これでお話を終えたいと思います。ありがとうございました。

不安と安心

教学研究所所員　名和（なわ）　達宣（たつのり）

はじめに――不安に立つ

私たちの誰もが、何か得体の知れないものに恐れをおぼえた時、心の奥底に不安を感じます。近頃の新型コロナウイルスの問題に見られるように、ことに現代の社会は、目まぐるしく変動する世相、錯綜（さくそう）する過度の情報によって、その感情がしきりにかき立てられているように思われます。そして私たちは、その不安を解消させようとして、さらなる情報を求めるのですが、安心を求めた結果、かえって不安が増し、がんじがらめに陥（おちい）ってしまっているというのが現実ではないでしょうか。

そもそも、不安と安心とは、相反するものなのでしょうか。安心というのは、不安を取り払った先に得られるものなのでしょうか。不安というのは、取り払うべきものなのでしょうか。

ここで想い起こされるのは、安田理深（やすだりじん）という先生が、親鸞聖人の教えをとおして見出された「不安に立つ」という視座です。安田先生は、不安というのは、人間を日頃の生活では忘れてしまっている

〝深み〟へと呼び戻すものであり、本願の智慧が不安というかたちで、私たちのもとへ至り届くのだといわれます。そして、安易な答えに座り込んだり、自分本位な安心感に浸ったりせずに、むしろ不安のただ中に身を置き続けることの大切さを説いておられます。

このことを、今日は親鸞聖人の次のお言葉をとおして尋ねてまいります。

無明長夜の燈炬なり　智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり　罪障おもしとなげかざれ

（『真宗聖典』五〇三頁）

これは、親鸞聖人が晩年に詠まれた和讃で、聖覚という兄弟子が、師の法然上人の亡くなられた後に詠んだ漢文の詩をもとにつくられたものであります。

光あるうち闇の中を歩め

この和讃を詠むたびに思い出すのは、大学四年生の夏、人間関係のトラブルから、「何のために生まれてきたのか」「このままむなしく死んでいくのか」と、人生にいいようのない不安をおぼえた時のことです。そして不安に押しつぶされそうになった私は、住んでいた街を飛び出して、気がつけば東本願寺の門前にたどり着き、そこで一夜を過ごしました。

その時、街灯のほのかな明かりをたよりに、三冊の文庫本を読みました。中島敦の『山月記』、芥川龍之介の『羅生門』、そしてトルストイの『光あるうち光の中を歩め』です。

これらの本は、門前に着くまでの間に古本屋で買ったものです。当時はあまり意識してはおりませんでしたが、どうやらその時の私は、人生に闇を感じて光を求めていた。だからこそ、その三冊を選んだのだと、後になってから気がつきました。

というのも、この三冊はいずれも「光と闇」がモチーフとなった作品なのです。『山月記』と『羅生門』は、最後は主人公が夜の闇の中に消えていく場面で物語が終わります。それに対してトルストイの作品では、タイトルに「光の中を歩め」とあるとおり、世間の愛欲にひたって生きる青年が、人生の節目節目で敬虔なるキリスト者との対話をくりかえし、そしてついには確かな信仰を得て、神の光に包まれる中でめでたく人生を閉じていくまでの遍歴が描かれています。一方では絶望的な「闇」が、もう一方では「光」に遇うという救いに至る道が描かれているのですが、なぜか当時の私は、一見わかりやすい「光」の物語よりも、絶望的なほどの「闇」に貫かれた物語に、強烈に惹きつけられました。

そして、その時の経験がきっかけとなって、翌年から真宗の学びを始めることになったので、親鸞聖人の言葉の中でも「光と闇」に関するものに、自然と目が向いていきました。そうして学んでいく

うちに、親鸞聖人の生きられた仏道とは、「光あるうち光の中を歩む」というよりも、むしろ「光あるうち闇の中を歩む」仏道、つまり無明煩悩の闇の中を、不安を抱えたまま歩んでいくことのできる道であるに違いないと思うようになりました。ただし、暗い闇の中を歩んでいくためには、灯（ともしび）でもって足下を照らしてもらわなければなりません。さらにいうと、そもそも闇の中を生きているということ自体が、光に照らされなければ知ることはできません。そのような「光あるうち闇の中を歩め」というメッセージが込められたのが、先ほど詠んだ和讃なのです。

無明長夜の燈炬

最初の一句に「無明長夜の燈炬なり　智眼くらしとかなしむな」とあります。「阿弥陀如来の本願は、無明煩悩の長い夜を照らす大きな灯である。だから、ものごとを正しく見る智慧の眼が暗く閉ざされているからといって悲しむことはない」というのですが、ずっと以前に、この中の「無明長夜」という言葉を指して、「無明の夜は長いんだね……」と苦しそうにつぶやいた友人の姿が、心に深く刻まれています。そしてそうしぼり出された時に、私はその友人の声に応えることができず、ずっと悶々（もんもん）と引きずっておりました。

今、あらためてこの和讃のおこころを尋ねてみますと、確かにここでは、無明の長い夜が一気に明けるとは説かれていません。しかし、それで十分だというのが、浄土真宗の救いではないかと今では受けとめております。

元来、私たちは、どこで迷っているのかを知らずに、そして自分が何者であるかを知らずに、もがき苦しんでいる。そうではないでしょうか。夜を照らす灯とは、闇を一気に消し去るような光ではありません。そうではなく、闇を闇と知らせ、それとともに、その夜の闇の中を安心して生きてゆくことのできる道を示すものにほかなりません。それを『歎異抄』の言葉でいえば、私たちの誰もが「煩悩具足の凡夫」であり、その私たちが生きる世界は、煩悩の燃え盛った「火宅無常の世界」であると知らせる光だということでありましょう。そしてその光が私たちのもとに届くというのは、最も具体的には、南無阿弥陀仏――念仏の声が聞こえ届くことを表します。

加えて重要なのは、その声は必ず、私たちに先立って念仏の道を歩まれた、具体的な人をとおして聞こえ届くということです。それは、親鸞聖人の和讃の背後に、師の法然上人がおられるという事実からしても、うかがい知ることができるでしょう。

この「光が闇を照らす」ということを、私たちの方からいいますと、闇を闇と知るというのは、闇

の世界に差し込む一閃の光と遇うことにほかなりません。親鸞聖人は『教行信証』の冒頭で、「無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」（『真宗聖典』一四九頁）といわれますが、これは、無明の闇が破られるということは、すなわち光に照らされることであるという事実を表します。つまり、自分は闇を生きていると知ることと、光に遇うこととは、実は一つの出来事なのです。そして、闇夜の世界を凡夫として生きるということに落着させられたならば、その夜は、ずっと夜のままの停滞した世界ではなく、たとえすぐに明けなくとも、「必ず朝が来る」という流れのうちにあることが同時に知らされるのです。だから、その事実と道理とを知らせてくれる教えの言葉、念仏の声を道標として、安心して闇夜を生きてゆけばいいといわれるわけです。

生死大海の船筏

このことが、和讃の後半では「生死大海の船筏なり　罪障おもしとなげかざれ」と詠われています。つまり「弥陀の本願は、迷いの大海原に浮かんで、私たちを浄土まで運んでくださる大いなる船である。だから、往生の妨げとなる罪が重いからといって、歎く必要はないんだ」と、親鸞聖人は呼びかけてくださっております。

私たちは、何か困難にぶつかって不安を感じた時、何とかその困難や悪い流れに抗(あらが)おうと悪戦苦闘します。しかし、その困難を抱えた不安な存在のまま船に乗り、そして行く先は船に任せればいいのだといわれるわけです。

このような生き方について、明治期を生きた清沢満之(きよざわまんし)という先学は、船を汽車に、つまり今でいう電車に置き換えて、「汽車に乗ったなら、すべての荷物を下ろして、その荷物も自分の身も安心して運んでもらったらいい」と語りました。これは人生に行き詰まり、前に進むことも、後ろに退くこともできなくなってしまって苦悩する青年に対して投げかけられた言葉です。そしてさらに清沢師は、「あなたは汽車に乗っても荷物を下ろさないがために、その重荷に苦しんでしまっている。しかし、それは如来の仕事を盗むということになるんだ」ともいわれ、私たちの存在をそのまま支えてくれる、大いなる願いがあることを示されました。そうして第一にそのことを確かめた上で、そこから「世に処する道」、つまり、この世を生きてゆく道が開かれていくのだと教え示されました。これは、生きることに不安を感じた時、第一になすべきは、身を任せて安心して転ぶことのできるような立脚地を見出すこと。しかし、そこで安逸をむさぼっていいということではない。立脚地を見出したならば、その大地を踏みしめた上で、各々のなすべきことに努めてゆくという生き方、それが「世に処す

る道」が開かれるということであります。

おわりに――不安を感じた時こそ

不安とは、人生が逆境に陥った時に感じられるものです。だから、順風満帆な生活を送っていると、なかなか意識することはありません。あるいは、たとえ心の奥底にあったとしても、そのことに気がつかなかったり、見て見ぬふりをしてしまったりしているのが、私たちの常（つね）ではないでしょうか。

親鸞聖人や先学方の教え導きに照らしてみれば、その不安とは、決して表層的な知識や情報をもって取り払ったり、覆い隠したりすべきものではありません。むしろ、私たちが日頃の生活の中では忘れてしまっている、人生を照らす灯と出遇い直すための大切な機縁となるものに違いありません。

新型コロナウイルスの騒動が大きくなり出してから、とみに「不安」という言葉が飛び交うようになりました。では、その言葉が出てくる根っこにあるものは、一体何でしょうか。不安ということをとおして、何か見えてきたものがあったでしょうか。

心に不安を感じた時こそ、足下をしっかりと確かめなければならない。そのように、私自身、あらためて思い直したことでございます。以上で終わらせていただきます。

誕生

青少幼年センター主幹　藤間（ふじま）　哲祐（てつゆう）

「誕生」には喜びと悲しみが包まれている

今回のテーマは「誕生」です。「この世界に生まれた」ということです。

「誕生」とは人間にとってどういう意義があるのでしょうか。

この世界に誕生したということは、必ずお父さんとお母さんがいるということです。

「誕生」という言葉を思うと、まず「子どもが生まれた喜び」ということを親として思います。

けれども、子どもにとっては、〝この世界に誕生した〟ということは、後になって、もの心がついてきて思うこと、特に、「あなたはお父さんとお母さんから生まれたのよ」と。親に教えられて気づくことが、普通、多いのではないかと思います。

そして、この世界に生まれたということは、必ず、終わりがあるということも道理です。この世界に誕生したら死ぬということは定まった道理です。

この点で言うと、誕生したということは喜びとともに、悲しみを内に包んでいるということです。出会うということは、いずれ必ず別れ離れる時が来る。親心としては、人情的にはつらい気持ちです。

誕生と死別、出会いと別れ、生と死、喜びと悲しみは、別々のことではなくて、一枚のコインの表と裏のようなものではないでしょうか。

赤ちゃんの成長でも、生まれて、育っていくということは、成長する前の姿はもう見ることができない。赤ちゃんのハイハイの姿は、立って歩いたという時から、もう見ることができません。そこには、成長の喜びとともに、えもいわれぬ寂しい悲しみの気持ちがあるのではないかと思います。何かそういう表裏一体の姿が人間というもので、誕生とは、そういう喜びと悲しみを抱え込んだ人間が誕生したということです。

「誕生」は私に深い願いがある

それでは、親に産んでいただいた、ということのみが誕生の中身なのでしょうか。そのことについて、中国の善導大師（ぜんどうだいし）が大切なことをおっしゃっておられます。

善導大師は、「誕生」ということは、単に父母がいるから生まれたというだけではなく、私が「生まれたい」という深い願いがあって生まれたのだということを教えています（『観経疏』「序分義」）。この世界に誕生するということは、お父さん、お母さんからこの身体を与えられたというだけではなく、私自身に、この世界に生まれようとする積極的な深い願いがあって、お父さん、お母さんは私が誕生することをたすけてくれた存在なのだと。そういうことなのだと思います。これは自分の誕生に対してとても主体的、能動的な捉え方だと思います。

「私は父母から生まれて来た」という説明はできるかもしれませんが、実際としては、気づいた時にはこの世界に誕生していた私。誰にも生んでくれと頼んだ覚えはないが、「いま、ここに、生きている私」というのが率直な実感ではないでしょうか。

「因縁和合（いんねんわごう）」の誕生の尊さ

そもそも、この私のいのちは、「因縁和合」。つまり原因とご縁が合わさり、あらわれた、長いいのちの歴史の中に生まれ出た存在です。その歴史の中で、生まれおちた時に、父母がいたというのが素直な実感です。その誕生からさかのぼっていくと、私の誕生のご縁となったお父さん、お母さんも、

そのまた上のお父さん、お母さんもまたその上も、因縁和合の不可思議ないのちの連続の中に誕生してこられたのです。いのちの歴史的リレーはどこまでもさかのぼっていきます。そのようないのちの歴史の中、今、受け継いで、生まれてきたいのちだけれども、その誕生には「私が生まれたい」という深い願いをもって生まれたということがあるのだ、と善導大師は教えているのだと思います。

そこには父母から生まれてきたという気づきはあるけれども、生まれた理由を父母のせいにするのではなく、私は自らの願いをもって生まれた独立した尊い存在であり、誰にも責任転嫁できない尊い人生を歩んでいるのだと、そういう自分自身の誕生の意味をいただく。そういう大切さを教えているのだと思います。そして、同じように私以外の一人ひとりも、子どもも大人も、男も女も、あらゆる国の人びともそれぞれが尊厳ある人間を生きているのだということです。

「誕生」とは千載一遇のまれな機会

そういう意味では、仏教では、人間誕生の意義を、「人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く」（三帰依文）と教えています。人の身として生まれることは、千載一遇（せんざいいちぐう）のまことにまれな、ただ一度の機会であると。誰とも代わってもらうことができない人生であると。自分と全

く同じ人は、どれほど過去にさかのぼっても、またどれほど未来になったとしても居ないと。今生きている一人の存在が私であると教えています。

そして、私とはそのような尊く重い存在であると教える仏法、つまり仏様の教えに出遇うこと自体が、さらにまれなことであると説かれます。「難し」という言葉に、まれな人身をいただけた、仏法を聞けたという感謝の思いがこもっています。

「いますでに受く」「いますでに聞く」とは、ほかの誰でもない、まれな人間の身体を受けた、この私なのだ、と、誕生の事実を積極的に受けとめた言葉です。

ただ、問題は、そのことを本当に納得して受けとめることができないエゴイズムの強い日ごろの私なのではないでしょうか。受けとめられずに、教え以外の理想の私を夢みて、親でさえ利用する心でみてしまう。そして、老いること、病気になること、死ぬことに苦しみ、人と比較して苦しみ、劣等感と優越感で一喜一憂して苦しむ。自分勝手な振る舞いで、自分を貶(おとし)めるだけならまだしも、他人をも巻き込んで貶め、自暴自棄で苦しんで、しんどくなってしまう。そういうことがあるのではないかと思います。

でも、だからこそ、だと思います。仏さまの教えが伝えられている理由は。自分自身を受けとめき

れずに苦しむ私がいるから、仏の教えが説かれている。同じように自暴自棄するほかない苦しみを抱えて仏法を求めた先輩がおられた。だからこそ仏法を聞いてほしいという先輩方の声があるのではないでしょうか。

エゴイズムを超えた父母との出遇い

親鸞聖人は、幼い頃に、お母様を亡くされ、お父様とは生き別れとなり、親戚のおじさんに育てられたといわれています。そして九歳の春の頃、出家されて比叡山にのぼったということです。そんな親鸞聖人は、まことの仏道を求めて歩まれました。その歩みには、私の想像ですが、幼くして別れたお父さんとお母さんに会いたい。そういう気持ちがいつもあったのではないかと思います。

親鸞聖人がおつくりになられたご和讃には、「釈迦弥陀は慈悲の父母」（『真宗聖典』四九六頁）と、お釈迦様と阿弥陀仏は、慈悲深いお父さんとお母さんのようだ、とか、「救世観音大菩薩　聖徳皇と示現して　多々のごとくすてずして　阿摩のごとくにそいたまう」（『真宗聖典』五〇七頁）と、阿弥陀仏の慈悲の心の象徴であります観音菩薩が聖徳太子としてあらわれて、お父さんのように見捨てず、お母さんのように寄り添ってくれている。そう詠われています。

このご和讃をつくられた聖人のお気持ちには、自分がこの世界に誕生し、育てられたところに、お父さんとお母さんが居たように、今、南無阿弥陀仏と申す私になれた背景には、阿弥陀仏とお釈迦様が父母の慈悲心のようにはたらいて、育ててくれていたんだなあ、と喜んでおられるように感じます。

親鸞聖人にとっては、自分を産んでくれたお父さんとお母さんには、直接には会うことはできませんが、南無阿弥陀仏と申すところに、父母を重ね合わせるように、見捨てず、寄り添い、護ってはたらく仏様、阿弥陀仏の慈悲の心に出遇うことができたという感動があったのではないかと思います。そのようなエゴイズムを超えた父母の慈悲心との出遇いを、私たちは、実は求めているのではないでしょうか。

阿弥陀仏のことを「親様」と呼ぶ地域もありますが、南無阿弥陀仏の子どもとして誕生させてもらった、「お父さん、お母さん」と呼ぶような親しみの感情が、阿弥陀仏との関係にあるということなのだと思います。

仏法を聞かずに人生を終えてほしくない

親鸞聖人は、そのようなエゴイズムの苦しみを超える道を求めた先輩です。親鸞聖人は、父・母の慈悲心を、お釈迦様、阿弥陀仏の教えに見出され、浄土真宗に出遇い、自らの誕生の意義を確かめたのではないでしょうか。

人身受け難し、ということを教える仏法を聞いてもらいたい。そのことを聞かずに人生を終えてほしくない。そのような先輩方や浄土真宗の教えを伝えてこられた方々の声に耳をかたむけていくことが、今大切なのだと思います。

人間として誕生したことの意義には、仏法を聞ける。仏法に出遇えるということがあります。そういう意味では、人間として誕生したということは、仏の教えを聞いていくまれな機会を得たということです。「その機会を逃すな」ということなのだと思います。

このことをお伝えして、終わりといたします。ありがとうございました。

真宗教化センター
しんらん交流館たより（第５号）
―いま、あなたに届けたい法話 Ⅰ

発行日　2020 年 7 月 1 日
発行者　但馬弘
発行所　真宗教化センター（しんらん交流館）

〒 600-8164
京都市下京区諏訪町通六条下る上柳町 199 番地
ＴＥＬ 075-371-9208（代表）
ＦＡＸ 075-371-6171
E-mail shinrankoryukan@higashihonganji.or.jp
しんらん交流館ホームページ（浄土真宗ドットインフォ）
https://jodo-shinshu.info/

浄土真宗ドットインフォ　検索